

## 日本文学の翻訳におけるジェンダーの諸問題

——シンポジウム「テキスト・ジェンダー・文体——日本文学が翻訳される  
とき——」を終えて——

ナカガワ シゲミ  
中川 成美

国文学研究資料館で毎年開催される国際日本文学研究集会も今年 37 回を迎え、盛況のうちに終わることが出来た。この準備、企画を行う国際日本文学研究集会委員会では、本年度の研究集会から、例年催してきた講演をシンポジウムに代えて開催する案が浮上した。委員会では村尾誠一委員長（東京外国語大学）、また資料館の研究集会担当の陳捷氏を中心にさまざまな方面からの検討が話し合われ、本年度は翻訳、特にジェンダーの問題について立案してみようということになった。本委員会の外部委員としてこのシンポジウム企画に関ったことから、以下その実施に至る経緯を説明し、またその成果、今後の課題等について報告したい。

日本文学の国際的な研究の中で、翻訳は単に各国語への変換という要素には止まらず、具体的に作品と読者を結び付けていく重要なファクターとなっている。国際研究において何よりも先ずその基礎作業としてあるのは言うまでもない。勿論、殆どの場合海外研究者は日本語で日本文学のテキストを読んでいくが、彼らの重要な仕事として翻訳がある。翻訳が透明に言語から言語への置換を行うことなどは不可能であり、その経過の中には必ずテキスト解釈、および文化翻訳が含みこまれるのは言うまでもない。だからこそ、外国語による日本語翻訳はそれ自体が研究の一環であると私は考えている。優秀な翻訳作業によって見出された新しいテキスト解釈の事例は枚挙に暇がない。

しかし、それと同等に共軛不可能なことも多くある。日本語における女性語の問題はその最も顕著な事例であろう。勿論、外国語にも性差による異なった表現言語を持つ事例はあるが、日本語では一人称によって先ず分別され、また男性と女性の使用言語が文字のレベルで違っていることを考えると、言語そのものに事前に含みこまれたジェンダーについて翻訳の際には考慮せざるをえない。日本語表現そのものが持つジェンダー分別をどのように翻訳に反映していくかは、これまでの翻訳史研究のなかでも多く考察されてきた。同時に日本文化論に相渉る問題として論じられてきた課題でもある。井上都（スタンフォード大学）は民族学の立場から“gender, language, and modernity: toward an effective history of Japanese women’s language” (“American Ethnologist” 29 (2): p392-422, 2002) のなかで、「女性語は日本語特有であるという仮説による文化的、伝統的概念は女性の発話に深く結び付けられてきた」と注意深く指摘しながら、日本近代の言語編成の中で女性語が国家、文化、人種、階級のなかで分節化されて新たな虚構的空間を作り上げたと述べている。その意味で女性語そのものは所与のものとしてではなく、一つの制度として見ていく必要があるのだが、それを翻訳に反映することの困難はこれまで指摘されてきている通りである。つまり女性語はただ単純に女性の慣習や気質に還元すべき問題ではなく、もっと広範な視角を要求される問題であるのではないだろうか。

こうした観点から本シンポジウムでは古典から近代まで広く範囲をとり、また国際的な視野からこの問題にアプローチしたいと考えた。勿論、領域をあまりに広く取ることは話題が散漫になってしまう危惧もあったが、敢えて問題点を抽出していく意味をも目的としてこの試みを始めることとした。当初、パネリストとしてマリア・テレサ・オルシ氏（元ローマ大学）、シャラリン・オルバー氏（ブリティッシュ・コロンビア大学）、呉佩珍氏（台湾国立政治大学）、ディスカッサントとして小嶋菜温子氏（立教大学）、司会として中川があたることとし、2013年1月にメンバーからの招聘受諾を受けた。

オルシ氏は2012年4月に“La storia di Genji”を文学系出版社として名高いエйнаウディ社から出版したが、日本古典語からの直訳による初めてのイタリア語訳「源氏物語」である。イタリア語による源氏訳は1928年にキク・ヤマタによって部分訳されたフランス語訳「源氏物語」(Le Roman de Genji)からの重訳であるイヴォ・ドメニキーニのもの(1942年)、またアーサー・ウエイリーの英語訳からの重訳である1957年のアドリエヌ・モッティのものしかなかったが、氏は12年間をこの翻訳に渾身して、2012年に出版した。「源氏物語」研究は古典文学研究の中で特にジェンダー研究が活発な領域であるが、物語内容、また翻訳双方におけるジェンダーの問題を考えていただいた。オルバー氏は現在広い領域での日本文学・文化研究を展開しているが、特に1930年代から50年代の紙芝居などの視覚文化、まんがやアニメなどの現代大衆文化、特に戦闘美少女などのサイボーグのジェンダー問題、また明治期から現代にわたる日本女性文学研究、および近年では押川春浪『海底軍艦』の翻訳をすすめている。多岐にわたる日本文化の大衆文化における視覚問題を中心に、特に翻訳におけるマスキュラニティ、男性性の問題にアプローチしていただくこととした。また呉氏は田村俊子、真杉静枝など日本近代女性文学と植民地主義の問題に活発に問題提起を続けてきているが、2010年にはフェイ・クリーマンの“Under an Imperial Sun: Japanese Colonial Literature of Taiwan and the South”(ハワイ大学出版局、2003)を英語から中国語訳(『帝國的太陽下: 日本的台湾及南方植民地文學』)に、また2011年には台湾で津島佑子の『あまりに野蛮な』(2008年)の中国語訳(『太過野蠻的』)を刊行した。東アジアにおける女性文学の互換的な可能性と、それに深く関与するポスト植民地主義の問題点から視点を注いでいただきたいという観点からの人選である。ディスカッサントには源氏研究にジェンダーの視点を早い時期に導入し、国際的にも活躍する小嶋氏に依頼し、古典と近代との間を繋ぐ「翻訳」の問題などにも触れながら統括的なまとめをお願いした。なお小嶋氏は国際日本文学研究集会委員会の外部委員でもある。以後パネリスト、ディスカッサントと電子メールによ

る打ち合わせを頻繁に行った。

英米語圏、ヨーロッパ語圏、アジア語圏というおおざっぱな言語圏からのパネリストを招待するという事は、実のところ言語の問題には止まらない文化表象の意識の相違、またアカデミックな側面ではそれぞれの研究方法の違いなどが、それぞれの発表には反映され、それらが交差したところにどのような衝突、また理解が生じていくかという刺激を発生していく。これまで国際会議を組織する時のもっともわくわくする瞬間は、このような事前の話題調整から往々にして生まれてくる。日本語テキストを中心として、世界各地からやってきたパネリストが相互に受け渡していく成果への期待が高まっていくのだ。

しかしながら残念なことにオルシ氏の来日日程が難しくなるという事態が発生、急遽やはりヨーロッパ語圏から急な人選をした結果、キアラ・ギディーニ氏（ナポリ東洋語大学）が参加してくれることとなった。ギディーニ氏はナポリ東洋語大学を終了後、ケンブリッジ大学にて学位を得たが、折口信夫を対象に文学、宗教学、民俗学に相渉る古典から近代までの日本人の宗教意識と文学について研究をする気鋭の研究者であるが、近代女性文学をジェンダーとの関係から探求する研究も行ってきた。また現在折口の『死者の書』の英語翻訳にも従事している。イタリア語、英語、日本語による日本文学・文化研究を推進する氏の仕事は、今回のシンポジウムテーマに沿う問題意識を共有するものと考え、緊急ながら依頼、快諾された。この段階で小嶋氏には源氏についての部分をパネラーとしてお願いするという事になった。なお、オルシ氏は当日に読みあげ原稿をお送り願えるということとなり、今回参考として添付することができなかった。記して謝意に代えたい。

こうやって調整したが、海外からのパネリストの招聘には様々な予測できない事態が出来る。シンポジウム直前に、オルバー氏のご家族の急なご病気で

来日が叶わないとのご連絡を受けた。事態が事態であるので勿論これを了承して、代替の方は立てずに当日司会から事情説明することとした。オルバー氏からは発表レジュメを改めてお寄せ願ひ、当日押川春浪を専門とする武田悠希氏（立命館大学大学院）から補足を含めてオルバー氏の発表趣旨説明をしてもらった。急ではあったが簡潔にまとめられた氏に感謝したい。

こうやってシンポジウム当日を迎えた訳だが、前々日に日本に到着したガディーニ氏、呉氏と打ち合わせを行い、進行について話し合った。ここで確認されたのはなるべく相互に乗り入れながら討議できるように論点を明確化しよう、ということであった。とはいうものの限られた時間内で十分に展開できるか、論点が広いだけに多少の危惧が残った。各パネリストの発表は、ここに収められたそれぞれの発表要旨、およびレジュメにて確認してもらいたいが、全体として何が問題として浮上したか、あるいはしなかったかについて簡単に言及しておきたい。先ず呉氏は近年続いて翻訳された台湾を舞台とする二つの日本文学作品、津島佑子の『あまりに野蛮な』（2008）と吉田修一『路（ルウ）』（2012）をとり上げ、女性作家と男性作家の差異、またそれぞれの台湾認識、植民地意識の細かな差異を抽出して、日本文学が「台湾」を「翻訳」する経緯の中で何が焦点化し、また何が取りこぼされてしまうかについて分析した。呉氏は津島が植民地主義の内実に潜む男性原理のあり方に迫ったものであるのに反し、吉田作品が「台湾」を女性化することによって文学的叙情を反復させる男性性の意識されない偏在化を指摘した。植民地主義的視角に代表的な方向として宗主国の非植民地へのフェミニナイズーションがあるが、現代においてもそうした視点のあり方は生き延びており、それはノスタルジーや抒情の発生と云う形で文学を支配している。呉氏はこうした抒情の力学に注目した。ガディーニ氏は折口信夫と円地文子の古代「翻訳」としての『死者の書』（1943）と『なまみこ物語』（1965）をとり上げ、「翻訳」主体のジェンダーの差異に注目して女声の呪術的力とその表象関係を分析した。古典と現代作品の差異は、次

に発表した小嶋氏によって明確にその輪郭を描いていくことになる。小嶋氏は『源氏物語』の古注釈を手がかりに時代によって異なる源氏解釈の根底にあるジェンダーバイアス、また時代によるジェンダー認識がどのように作品解釈に影響を及ぼすかについてを鮮やかに描出した。解釈と云う体系は勿論一種の「翻訳」作業であるわけだが、それ以上に女性の階級的な基盤が経済や社会、文化の趨勢の中でどのように変化していくかに注目しない限り、解釈自体が成立しない事を明らかとした。古典と現代という日本語、日本文学の差異と同様に、外国語に「翻訳」という行為はまたそれぞれの文化圏への理解を要求することとなる。同時に女性文学というような範疇に固定化するということが自体が実のところ、ある時代のジェンダー規範の制約の中で実行されていることが、参考として付帯したオルシ氏の発表原稿に詳しく述べられている。オルシ氏は「本質的に女性文学と定義づける事のできる作品が果たして存在するのでしょうか。いわゆる女性感覚、女性感性というのは本当に存在するのでしょうか。それとも社会構造の影響を受けることで女性もしくは女性感性による作品が誕生するのではないのでしょうか。」として、事前的な「女性」文学はないことを述べ、それらが相対的な男性との社会的関係の中で構築されていくことを指摘した。

そうやって考えていくとオルバー氏がやはり参考に挙げた要旨のなかで明治期の男性的表現が国家主義と結びついていく経緯に言及している。「ふさわしいマスキュリニティと国家主義の強い結びつきを理解できるように、『海底軍艦』で用いられている様々なタイプのマスキュリンな勇ましい文体を的確に翻訳することが一番の問題なのである。」としてその翻訳作業に及ぶ「解釈」の多義性をどのように扱っていくかということは、翻訳にとって重要な課題として認識される必要があることを強調している。また当日の解説をした武田氏はそのなかで少年が使う「可愛い」女性的な言葉使いの意味についても考察していく必要があることを指摘した。

男性と女性が双方の関係性の中で紡いできた語法とその運用は、それ自体が「意味」を出現させ、力関係をあからさまにしていく。前期の井上氏が女性語の「優しさ」、あるいは「丁寧さ」、「上品さ」についてを事後的に付与された価値の認識が、ジェンダーの配置によって出現した表現であることを喝破しているが、「翻訳」とはそうした意味作用の決定というところにも及んでいく作業であることを理解していかなければならないであろう。近年、文化翻訳という言葉で明示化された、双方の文化理解の文脈にどのようにテキストを融合させていくかと問題は、このシンポジウムで明らかになったようにかなり慎重な手続きが必要であると思われる。単なる言語や物語内容の安易な「伝達」では「翻訳」は成立しない。常に言語にかけられた負荷を意識するところに「翻訳」の要諦はあることが、シンポジウムで明らかになったように思える。古典から現代という日本語のなかでの「翻訳」、日本語から外国語への「翻訳」、また女性語から男性語への「翻訳」というように何重にも負荷された問題に、どれくらい読む、あるいは解釈する主体が関わっていくかという新たな日本文学研究の課題、および方向がぼんやりとだが見えてきた気がする。今回のシンポジウムでもそうであったが、近年は電子メールやSNSの発達によってスムーズで簡便な相互通信が可能となっている。以前に比べて国内、国外の別なくほぼ同時に情報がとり交わせ、また意見交換ができるようになった。本シンポジウムも頻繁なメール会議によって詰められていった。こうした装置を有効に活用しながら、問題意識の共有と意見交換を持続させたいと考えている。様々な経緯の中で結果的には多くの参加者が関わる形となった本シンポジウムであるが、多くの御意見を交差していくことを願いながら、司会からの報告とし、あわせて当日に参加された多くの聴衆の方々へ心からの感謝を申し上げたい。

